

7 災害にともなう病害虫

(1)発生源となる病原菌類

花き類全般に共通する病害虫、特に病害発生について、その発生源となる病原菌類は次のとおり挙げられる。1. 細菌(バクテリア類) 2. 糸状菌 3. マイコプラズマ様微生物 4. ウイルス 5. ネマトーダ類

これらの病原体のうち、気象災害(水害、雨害、風害、湿害、干害)によって発病を助長するチャンスを狙う病原菌は、細菌、糸状菌類が多い。干害等の気象災害によるものとしては、糸状菌病の中では、うどんこ病類、害虫類では、ハダニ類が多くなり、災害の種類、その程度によっては対象となる病害虫が違ってくるので注意する。

ア 細菌病の一般的性質

細菌は、糸状菌類と違い、病原細菌が植物体の傷口から侵入する性質がある。このため、風害の激しかった後は、当然この菌による病害が発生しやすい条件になる。

また、土壌伝染性があるため、気象災害によって、作物体が弱り、耐病性に欠ける場合には、発病のチャンスにもなりかねない。また発病を助長することが多い。

イ 糸状菌の一般的性質

気象災害によって衰弱した植物は発病しやすく、また発病を助長する原因ともなる。特に曇雨天が続く、多湿が高温と重なると、ほとんどの糸状菌は活動を始める。

害虫類としては、干天時(高温、乾燥)に、ハダニ類が多発することに充分配慮しなければならない。

ウ その他の病原菌類

マイコプラズマ様微生物、ウイルス、ネマトーダ類については、花き関係気象災害として特記するものはなく、通常の防除対策でよい。

花きの病害虫については、上記のように、気象災害に対応する防除対策、一般的防除対策の二つのパターンがあるが、花き特有の美的観賞が生命である作物であるので、一般の農作物に比べ、充分な対応が必要である。

なお、花き全般に言えることば、災害時に対応できる農薬の種類、使用方法等の登録が不十分で、すべてのものに対応できないことが最も大きな問題である。

したがって、使用できる農薬については積極的に利活用し、使用できないものについては、耕種的防除方法を今後とも採用、また調査研究しなくてはならない。

(2)気象災害の種類とその対応策

ア キク(水害、雨害、湿害)

気象災害の中で、上記の災害での被害が多く、特に水害によって起きる「キクの根腐」は、その後の病害虫の発生を助長しやすくなるが、根腐症そのものの被害が甚大となるので、浸水、冠水の程度の強弱に関わらず、災害後は直ちに排水に努め、生育が停止しないような対策が何よりも重要である。

根腐を起こす原因は、土壌中の病原細菌類が関与する 경우가多く、また、糸状菌類の一部が認められている。この傾向は連作している圃場に強く現われる場合が多いので注意する。

上記の緊急対策を実施したあと、弱っている地上部の対策として、次のことを実施する。

地上部に発生しやすい病害は、白サビ病、黒斑病、うどんこ病等が挙げられるので、直ちに防除をする。

(ア) 白サビ病

薬剤は病害虫防除基準によって適応するものを選定し、時期を失しないよう散布する。

この場合、災害時からの根傷み、根腐等で、生育が不良になっていることが多いので、薬剤散布時に注意して、薬害防止のための配慮をしなくてはならない。

使用濃度を守り、使用薬量も一度に多くしないこと。葉裏にも充分薬剤が付着するように入念に散布すること。さらに、災害時、発病した葉があれば、摘葉し焼却すること等が重要である。

(イ) うどんこ病

本病は、N質肥料が多いと発病しやすく、気象災害で多湿になった環境でも多発しやすい。またキク全体が災害で弱ってくると発病も助長するので、薬剤は病害虫防除基準によって適応するものを選定し、時期を失しないよう早期に入念に散布する。

(ウ) 黒斑病

本病も、災害時に直接、間接的に発生する病害で、N質多用の圃場で発生しやすく、気象災害が加わると本病を助長する。

病害虫防除基準によって適応薬剤を選定し、時期を失しないよう早期に災害後早目に散布する。

イ キク(干害)

干害を受けると、キク全体が弱って耐病性が低下するが、このような場合、うどんこ病、ハダニ類について充分注意して防除を徹底する必要がある。

(ア) うどんこ病

前記を準用すること。

(イ) ハダニ類

干害(干天、日照過多、乾燥)が続くと、ハダニ類が多くなる。次の農薬で徹底した防除が必要である。

病虫害防除基準によって適応薬剤を選定し、時期を失しないよう早期に災害後早目に散布する。